

露地栽培モモの平棚仕立てに適した整枝法

岡田眞治・益田信篤 (熊本県農業研究センター果樹研究所)

Shinji OKADA and Nobuatsu MASUDA

The Method of Training of Peach Tree Cultivated by Flat Trellis in the Open Field

ビニルハウス栽培での平棚仕立ての整枝法については、H字形整枝または改良H字形整枝が適していることをすでに報告した。今回は、露地栽培での平棚仕立てにおける整枝法について検討した。

1. 材料および方法

試験1 1992年4月2日に、5.5m (株間) × 6.0m (畝間) で植栽されていた6年生‘瀬戸内白桃’の地上60~80cmの主幹部に‘川中島白桃’を高接ぎし、2本主枝、3本主枝および4本主枝の区を畝毎にそれぞれ3樹ずつ設け、1992年~1999年にかけて幹周、樹冠占有面積、着果数、果実品質、収量等を調査した。なお、各区の主枝と側枝の長さは、樹間距離の範囲内で樹形が乱れないように調整していった。

試験2 立木仕立ての5年生‘川中島白桃’2樹と8年生‘長沢白鳳’1樹を用いて、1991年から平棚仕立てへの改造を行い、樹形、樹冠占有面積、着果位置、着果数、果実品質等を調査した。

2. 結果および考察

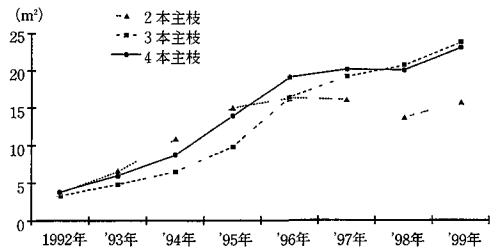
試験1 幹周の肥大率 (1998年/1992年) は、2本主枝区が1.55、3本主枝区が1.48、4本主枝区が1.62であった。樹冠占有面積は、高接ぎ4年目までは2本主枝区 > 4本主枝区 > 3本主枝区の順であったが、高接ぎ5年目では4本主枝区が19m²で最も広くなり、6年目以降は3本主枝区と4本主枝区には差がほとんどみられなかった。一方、2本主枝区では高接4年目以降は15m²前後であった (第1図)。なお、樹冠拡大期に、2本主枝区では主枝とその基部側の側枝、3本主枝区では主枝と亜主枝との勢力バランスを維持するのが難しく、両区とも外周部の無効面積が4本主枝区より大きかった。

1樹当たりの7年間の累積着果数および収量は、主枝本数が増えるほど増加し、2本主枝区に比べて、いずれも3本主枝区で26%、4本主枝区で33%多かった (第2図)。平均果重および平均糖度については、区間差はほとんどみられなかった。

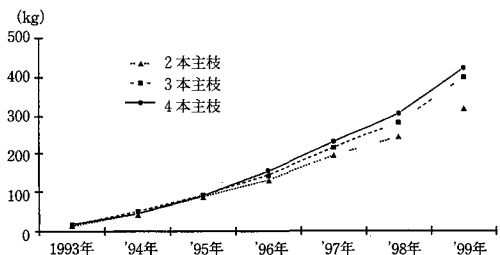
試験2 棚面を早期に埋めるためには、改造当初は亜主枝状の大きい側枝を多く残す必要があった。ただし、棚下から発生した大きい枝は主枝形成を阻害する傾向にあったので、樹勢を考慮しながら早めに剪除した。また、樹間距離との関係で、主枝先端部は開かせた方が樹冠占有面積率は向上した (第3図)。

以上のことから、4本主枝が2、3本主枝より棚面を有効に利用でき、主枝と側枝間の勢力を調整しやすいことが認められた。よって、露地栽培でも、当初から平棚に

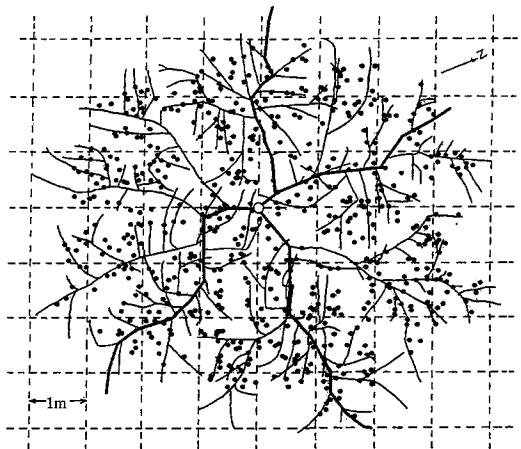
仕立てていく場合は、ハウス栽培と同様、H字形または改良H字形整枝が平棚仕立てに適した整枝法と考えられた。ただし、立木仕立ての樹を平棚仕立てに改造する場合は、樹間距離が5m以上であれば、X字形整枝またはそれに類似した整枝法で仕立てた方が有利と考えられた。



第1図 樹冠占有面積の年次別推移



第2図 1樹当たり累積収量の年次別推移



第3図 立木から平棚仕立てに改造した‘川中島白桃’の8年目の樹形と着果位置 (樹齢: 12年生)